

## 行き当たりばったり

ずいぶんと旅に出ていない。去年の2月に目黒君のJR全線の完乗旅行に付き合っ、5月に下松にいる楠君の下宿に遊びに行って以来だ。それから、もう9ヵ月も経っているよく禁断症状が出なかったなと思う。

そんな折り、目黒君が学生最後の春に北海道と九州へ旅に出るといふ。それについて来いと言う。

誤解のないように断っておくが、同い年の目黒君は単位に汲々として大学に長くいるのではない。大学、大学院、博士課程を経ての大学在籍なのだ。その博士課程はまだ修了していないけど、今年就職が決まったので、中退して春から社会人になる。

話を戻す。さすがに旅とはご無沙汰している私といえども、一時に北海道と九州の両方へ行けるほど経済的に楽ではない。禁断症状が出てもこればかりは何ともしようがない。だから、四国から近いほうの九州は行きに付き合うことにした。

まず、日程から決めなくてはならない。目黒君にとって学生最後の春だから、これからはお互いそう容易く会うこともできないだろう。それで楠君も誘って3人で行くことに決めた。我々3人は中学以来十数年の付き合いになる。

このうち、いちばん忙しいのは楠君である。私も仕事をしているけど、今ならある程度自由が利く。目黒君は入社までは問題ないだろう。だから、楠君を軸に決めていこうということになった。

楠君は週末には休めない仕事に就いている。しかも、休みは週に1回しかない。ただ、毎月最後の週には連休がある。2月か3月の最終週にしよう、ということになった。

ところが、そう簡単に事は進まない。

2月のある日、楠君から電話があった。2月最終週の連休に困ったことに仕事が入ってきたという。普通なら他の人が代わるなりすれば、支障はなさそうだが、その仕事はどうも相手方の要望でぜひ楠君に、とご指名を受けたのだそうだ。そのような仕事を断れるはずがない。

同時に目黒君周辺でも雲行きが怪しくなってきた。北海道へ立つ数日前に電話がかかってきて「2月末は厳しい」と言う。大学の行事の関係でどうしても出席しなくてはならないものがあるらしい。前でも後でもずらせないかと聞いてみたら、前は急だし、後にしてもやはり大学で何かあると言う。まだ決めてしまうこともないだろうということで、とりあえず、保留扱いになった。

保留といっても、この春に九州へ行くこと自体はほとんど潰えたといっている。だから、ないなりに工面していた旅費も使うようになり、次回行けそうなのは、ゴールデンウィークかなと思うようになった。楠君にも今回はなし、ということでまた今度にしようと伝えた。

この間、私自身もいろいろ変化があつて、2月が無理で3月最終週に持ち越されると、今度は私の事情で行けなくなってしまふ。でも、一度こういう話が出ると、目の前に人參をぶら下げられたロバのようなもので、どこでもいいから旅に出たいという衝動を抑えられなくなってしまった。

ところで、私が楠君に今回はなしと言った一方で、目黒君に保留扱いにしようと言ったのには、実は考えるところがあったのである。

目黒君にしても、私にしても全く都合が合わないということはありません。さきほど、3月最終週は「今度は私の事情で行けなくなってしまおう」と書いたけど、その事情のために3月1日から10日の10日間は暇ができる。この10日間で目黒君の空いている日と合わせる。それで2人で黙って下松の楠君の下宿へ行こうと考えた。いわば奇襲作戦である。その案を持って目黒君に電話をすると、

「よし、それで行こう」

即断である。こんなに早い目黒君の決断を見るのは珍しい。3月7日まで目黒君は大学にいないから、日程は8日から10日の3日間に決まった。8日の朝、目黒君は新幹線で、私は「マリンライナー」で出発して、岡山で合流。それから下松まで、途中、初乗り以来8年もご無沙汰している呉線を経由して、在来線をのんびり西下しようということになった。

実はこの「下松急襲」は去年5月に行ったときに使った手だ。このときは数ヵ月前に予告してあったから、厳密には急襲には当たらないかもしれない。もっとも、楠君はその数ヵ月後に私の仕事場へ現れてお返しをしている。

今回、九州は没、また今度と楠君に伝えた電話のときに、

「実は今回の九州へ行く2日前に、目黒君と2人で君の下宿へ黙って寄ってから3人で行こう思った」

「また、そんなことをする。でも、それはなくなっても言うたらいかんわ」

「そうか？ま、これで完全になくなったわけやし、バラしてもええやろ。それに金もないけん、どこも行けんわ。四国ですら回れん」

「せっかくの休みやのにもったいない」

「このところ結構物入りだったし、今回は仕方ないわ」

という話をして布石は打ってある。だから、我々が来るとはよもや夢にも思うまい。

帰りはどの列車で帰っても、10日中に帰って来られればいいけど、行きはそうはいかない。楠君の仕事上がり時間が17時ないし19時だから、そのどちらでもアパートの前で待たされる時間に着きたい。もちろん、8日の勤務体制を聞けるはずもないから、下松に夕方に着く列車がいい。だから、うまく行けば、すぐに会えるけど、下手をすれば2時間くらい待ちぼうけになるかもしれないし、同僚と飲みに行くとかで午前様になるかもしれない。こちらも急襲する以上はこのくらいの覚悟は必要だ。

以上の結果、決まったのが、目黒君は東京7時07分発の「ひかり33号」博多行きで11時01分の岡山で降りる。私は高松9時50分発の「マリンライナー16号」で10時45分に岡山に着いて、ここで目黒君と合流する。あとは、11時13分発の岩国行きで三原、三原で呉線の広行きに乗り換えて、広から下関行きに乗って下松まで行く。到着は17時16分で時間帯としてはベストである。楠君の住むアパートは駅から歩いて15分くらいのところにあるから、真っすぐ行けば、17時半くらいから待たされる。17時上がりなら18時見当で再会できるだろう。

ただし、これはちゃんと会えればの話である。当たり前だけど、どんなに遅く帰ってきても我々は彼に文句のひとつも言えない。急な帰省や出張などで下松にいないでも同様である。目黒君と私はそのことに関して何一つ相談をしていない。もちろん、会えないと分かれば、少なくともその夜についてはホテルに投宿するしかなさそうだからそうするけどそれだけは避けたい。こちらの勝手に押し掛けておきながら、無茶なことを言っているの

は十分承知しているけど、ここはひとつ、彼がちゃんといると信じて行くことにしよう。我々2人は楠君が下松にいることを前提にこの計画を進めているのだ。馬鹿げたことをやっていると思われるかもしれないけど、これはこれで2人とも楽しんでいるのである。形はどうあれ、9ヵ月ぶりの旅に出る。

朝は7時に起きたので、ゆっくりしている。朝食を摂ってもまだ時間が余る。今日は快晴だ。行った先で相手が待っているわけではないし、旅程3日のメインとなる明日の予定だって何も決めていない。全く自由気ままな旅だ。何も考えなくていいから気楽でいい。こんな旅は鉄道ではなかなかやりにくい。

9時すぎに車で高松駅まで送ってもらう。土曜日だから道も空いている。

高松駅は大勢の人で賑わっている。まだ、切符を買っていないので、みどりの窓口に入る。すると、これまたどの窓口も5、6人の行列ができています。その中でも短そうな列に並んだ。すぐに順番が来て「青春18きっぷ」を購入した。これは私の往復分と岡山で合流する目黒君の帰りの切符になる。私が下松を往復するだけで「青春18きっぷ」ほぼ一冊分の元を取っている。

9時半ごろ、改札を通る。「マリンライナー」の発着する6番線に立っているけど、コンコースの賑わいと比べるといまひとつのようだ。改札から一番遠いホームだからかもしれない。

9時40分過ぎに岡山から来た「マリンライナー」が入線してきた。この折り返しが、これから乗る「マリンライナー16号」となって岡山まで行く。私は先頭車両の乗り場で並んで待っていたけど、乗り込むときにはどの列も長くなっていた。さっきのコンコースの賑わいがいつの間にかこちらに移ってきたようだ。瀬戸内の浜風が冷たい。

わずか10分程度の折り返しなので、落ち着いたと思うまもなく9時50分、定時に発車した。

右手はかつて多くの引込線があり、そこに客車や貨車が並んでいて壮観だったけど、今は高松駅周辺の開発が始まり、更地になっている。その更地へこれまで市街に点在していた官公庁が移転してくる。民間企業用の用地やマンションの建設予定地もあるそうだ。それと並行して、港湾設備の整備も行なわれる。これを総称して「ウォーターフロント計画」と呼んでいる。いつ完成するのか実は何も知らない。

電車だから加速がいい。すぐにスピードに乗って高松運転所をかすめると、轟音とともごしきだいに香東川を渡る。鬼無で下りの「マリンライナー」とすれ違って、右に五色台を見ながら走る。

今回、行きのハイライトは8年ぶりの呉線だけど、その前に坂出駅の高架完成というのがある。どこの高架工事もそうだけど、坂出駅の場合も、例に漏れず踏切渋滞の解消が目的だ。これで南北の往来がスムーズになる。完成したのは、つい2週間ほど前の2月26日だ。

快調に飛ばす「マリンライナー」も鴨川、八十場付近ではどの列車もスピードを抑え気味に走る。ずっと120キロの制限速度いっぱい走っていると、同じ区間を走るディーゼル特急より所要時間が短くなるからだろうか。別に遠慮などしなくてもいいと思うのだが、鴨川を出ると大きく左にカーブするからかもしれない。その八十場を出ると、いよいよ高架区間に入り、規則正しく響いていたレールの継目の音が消える。

高架を登り切ると眼下は坂出の市街が広がる。右手の遠いところに瀬戸内海とそこに架かる瀬戸大橋が見える。坂出はこんな街だったのかと改めて見入った。隣に座っているお

じさんも高架になって初めて乗るのだろう、身を乗り出して眺めている。「マリンライナー」はそんな坂出の街を見下ろしながら、ゆっくりと真新しいホームに入った。

寝台特急「瀬戸」の13両のフル編成が停まるには長さの全く足りないホームで、閑散期の9両編成がぎりぎりかと思われる。もちろん、「瀬戸」のためだけに十数両分のホームを造るのは無駄だけど、東京から来た長大編成のブルートレインが頭かお尻か分からないけど、ホームからはみ出して停車する様子を思い浮かべると何とも格好が悪い。

坂出ではかなり乗降があったけど、プラスマイナス0、高松出発時とほぼ同じくらいの乗客を乗せて発車した。

しばらく高架が続いて、坂出の街を出外れると瀬戸中央自動車道の下をくぐる。その手前で地上に下りたと思う間もなく、切り通しを抜けて再び高架に入る。大きく右へ右へカーブして北へ向きを変え、予讃線と分岐する。一旦、西の宇多津方面へ向かいながら、行き過ぎたので瀬戸大橋のある東へ反転するように戻る。だから、それまで左にあった太陽が、ここだけは右から射している。もうすぐ、先ほど交差した瀬戸中央自動車道の下にもぐる。

瀬戸大橋と合流した途端に周りは人家がなくなり、工場群が広がる。昼間に見ると武骨で埃っぽくて何ということはない風景けど、夜はこれらの工場にライトが点灯されて、煙突からは炎が立ち、以前、テレビや映画で人気を博した「銀河鉄道999」で見られる宇宙都市を思い起させる。

別に私の筆がもったいぶっているわけではないけど、実際なかなか海上部分には出ない右手は工場群、左手には瀬戸大橋記念公園が見える。これを過ぎると、やっと海に出られる。自動車道とJR線が合流した辺りから北へ向かっていて、高架の足元は埋め立て地帯である。その埋め立て地帯に入って、かれこれ1分近く走っている。

その記念公園の横に見える小高い丘のようなものは、かつては沙弥島という島であったこの工業団地を造成するために海を埋め立てた結果、陸続きになってしまった。快速で1分程度の距離だから陸続きになってもおかしくはない。右手には同じく陸地とくつついた瀬居島せいも見える。ただし、いずれも名称は沙弥島、瀬居島で変わっていない。名称上は島でも、今や車さえあれば坂出の中心はおろか、どこへでも行くことができるようになったので、限られた船便よりずっと便利になったに違いない。

空は雲ひとつない晴天で気持ちがいい。でも、このところずっと天気がいいので、遠くは少し霞んでいる。海は青と緑を混ぜたような色をしている。これをマリンブルーというのだろうか。その中を大きなタンカーから小さな漁船まで様々な船が往来している。左手しわくに広がる丸亀沖の塩飽諸島も適度な間隔で点在しているので、見る者を飽きさせない。

私は瀬戸大橋を渡るときはいつも進行方向の左側の席に座る。右側だと、行きなら下り線、帰りなら上り線が間にあって、海はその向こうになって見えにくいからだ。行きに見る丸亀、多度津方面の瀬戸内と、帰りの高松方面の瀬戸内はまったく表情が違う。これから通る広島や山口で見る情景もしかりだ。瀬戸内海の見所は島々の構成美だどつくづく感じる。

ちょうど中間の与島を通る。ここにはパーキングエリアがある。でも、瀬戸大橋を利用する車の台数に比例するように広い駐車場も持て余し気味だ。そんな与島をあっさり駆け抜けて行く。

島伝いに走って鷺羽山の上にある遊園地が見えてくると、下津井トンネルで岡山県に上陸する。ここで私の持っている携帯電話が、違うエリアに入ったことを示す「Rm」が表示

示された。半年ほど前、飲み屋の抽選であたったので、「ただでもらえるのなら」と、持つことにした。だから、私の旅に帯同するのは当然初めてである。

今回は青春18きっぷでの旅だからというわけでもないけど、いつもなら5行から10行で終わってしまう高松ー岡山間をのんびり進行している。毎度毎度10行程度では景色のいい瀬戸大橋線に申し訳ない。それに我が香川県の描写など皆無に等しいから、地元をおろそかにするな、と怒られそうである。そういう気持ちと久しぶりの旅という相乗効果か外を見る目がいつもと違っている。

トンネルを抜け、右に競艇場が見えてくると、高架の児島駅に到着した。降りる人はほとんどなく、逆に大勢乗り込んで、立ち客が目立ってきた。ここでJR四国と西日本の乗務員が交替して発車する。

児島と茶屋町の間には高松側から木見、上の町、植松と3つの駅があって、植松ー茶屋町間を除いた3つの駅間でトンネルがある。児島の手前でも下津井トンネルをくぐるから、4つのトンネルが駅を挟んで連続している。というより、4つのトンネルの間に駅があるのではないかと思うくらいトンネルのほうが長く、抜けるのにも時間がかかる。携帯電話の「圏外」表示がトンネルの長さを物語っている。

植松を過ぎると、右手の田んぼの中から宇野線が寄り添ってきた。かつては宇高連絡船へ通ずる動脈だったけど、瀬戸大橋の開通で宇野線の南半分の茶屋町ー宇野間はさびれた今ではこの単線のレールの上を短い編成の電車が1時間に1本ないし2本運転されているにすぎない。

8年前に宇野駅へ行って見た。8年前というと、瀬戸大橋が開通してちょうど1年後である。1年経ったら行ってみようと思っていたのだ。既に連絡船乗り場は取り壊されていて、相当数あった貨物の引込線も全て撤去されていた。ただ、駅舎だけはそのまま、外観は小さく見えるが、中は案外広く天井が高い。頭上の壁には旅館案内や地酒、銘菓の看板が並んでいて旅情を誘う。それだけに一層寂しさを増していた。今ではその駅舎もなく駅自体も少し北へ移転して、昔日の面影はないという。旧宇野駅はこのとき見たのが最初で最後であった。連絡線時代は宇野駅で降りることがなかったのである。この日は、行きは「マリンライナー」で茶屋町回りだったけど、帰りはフェリーにした。

その宇野線が瀬戸大橋線の高架をくぐって、左から上ってきて合流すると、茶屋町に着いた。乗客はさらに増えて通路までいっぱいになった。

これから岡山までは宇野線になる。同じ宇野線でも運転本数、優等列車の有無など茶屋町を境に正に雲泥の差だ。でも、優等列車が走ろうが走るまいが宇野線は宇野線だ。沿線風景はほとんど変わっていない。いずれ複線化されると思うけど、5年くらい前に早島付近の一部を複線化した以外は未だに全線単線だ。

その複線化だが、岡山駅周辺はそれらしい用地はなさそうだし、これからその土地を買収するのは難しそうだから単線で残るとしても、それでも妹尾ー茶屋町間くらいは複線にできると思う。もちろん利用者としては岡山ー茶屋町間の全線複線化が望ましい。もしこれが実現して、ディーゼル特急に遠慮せずにダイヤが組めたら、「マリンライナー」は岡山ー高松間を50分くらいで結ぶのではないか。そうすると、大阪まで確実に2時間で行くことができる。

とはいえ、この変わっていない宇野線が好きで、この辺に広がる井草の田んぼや畑がいい。時折り、農家や小さな工場があり、田んぼの真ん中には様々な看板が立っていて、家が多くなったと思うと駅が現れるという、いかにも「田舎」といった風景が続く。

最後の停車駅である妹尾を出ると、岡山まではもうすぐだ。まだ賑わうまでには至っていないけど、周辺は区画整備がかなり進んでいる。

備前西市の手前で国道2号をくぐると、いよいよ岡山が近くなる。次第に田んぼも減ってきて、かわってビルや工場が多くなり、大元を過ぎると太い県道21号と交差する。と、同時に乗り換え案内が始まる。

岡山駅は山陽本線の他に、新幹線、赤穂線、津山線、吉備線、伯備線、それから今乗っている瀬戸大橋線と接続しているから乗り換え案内をするのに1駅分の所要時間を要する言い終わったと思う頃には新幹線と交差して、山陽本線を跨ごうしていた。10時45分、岡山着。

「マリナー」から降りたほとんどの乗客は新幹線に乗り換える。私はこれから山陽本線の普通列車に乗るけど、列車が出るのは7番線からだ。この7番線というのは新幹線改札口のあるコンコースの真下にあるから、私も新幹線の乗り換え客とコンコースまで一緒に歩く。

7番線には発車を待つ電車が停まっている。なんと本来は通勤型の103系電車だ。こんなロングシートの車両に乗って三原まで行きたくないけど、これが予定の列車なら仕方がないと乗り込んだ。

何の気なしに乗ったものの、本当にこれに乗っていいのかと、ふと思った。念のためホームに降りて時刻表を見てみたら、2本早い電車であった。この型の電車に乗らずに済んでよかったと思ったけど、目黒君に先駆けてあやうく先発するところだったので、ほっと胸を撫で下ろした。

6年ほど前、上野から北海道へ行くのに青森行き急行「八甲田」を使ったのだが、今回と同じように、すぐ目に付いた客車に乗った。そのまま発車を待って車内放送に耳を傾けると、実は金沢行き急行「能登」だったのだ。同じ系列の車両を使っていたこともあり、つい思い込みで乗ってしまったのだけど、あと数分で発車するところで、慌てて下車したのを思い出した。

ベンチに腰を下ろして、11時13分発の列車を待っていると、先ほど乗って行こうとしていた列車が発車していった。その数分後、4両編成の岩国行きが入ってきた。これはドア付近がロングシートになっている他はクロスシートの構造であるセミクロスシートと呼ばれるいわゆる近郊型の電車である。これが予定の列車で、安心して乗り込む。

目黒君はもう到着しているはずだ。発車まで10分を切っている。

すると、進行方向に向かって座っている私の前のドアから目黒君が入ってきた。でも、こちらを一瞥もせず、前の車両のほうへ消えていった。いないと分かれば、こちらに戻ってくるだろう。

私を見つけられるはずもなく、ホームに降りている。目黒君に手を振ってみたけど、気が付かない。彼は公衆電話から電話を掛け始めた。賢明な選択だ。すぐに私の携帯電話が鳴り出した。

「もしもし」

「今どこにおるん？」

「今、君が電話掛けよんが見えよるで」

「なんとな」

「左斜め後ろ見てみ」

目黒君が振り向き、こちらに気が付くと、私は手を振った。

苦笑しながら目黒君は電話を切り、私のほうへ歩いてきた。携帯電話はこういうとき便利だ。

「久しぶりやの」

「この車両から乗ったのに、全然気が付かんかった」  
「こっち見んと行ってしまうのに。まあ、ともあれ無事合流や」

まもなく、11時13分発の岩国行きが発車した。

呉線は8年ぶりだが、これから乗る岡山ー三原間も3年くらいご無沙汰している。学生時代以来、年に最低1回は楠君のいる山口県へ行くけど、このところ新幹線利用が多く、在来線に乗る機会はなかなかない。

目黒君は2階建て車両が2両連なっている「ひかり33号」でやって来た。この列車を選んだ理由は分かっている。

「何食ったん？」

「ミートスパゲティ。大阪出てからや」

「ええのお」

「ほんだけん、来い言うたのに」

「それは言われてないぞ」

「ひかり33号」では今や希少価値となった食堂車が営業されている。

5年ほど前、「みずほ」から始まった東京ー九州間のブルートレインの食堂車の営業休止の波は新幹線の食堂車・ビュフェにもおよび、現在東海道・山陽新幹線の定期列車で食堂車・ビュフェを営業しているのは、あれだけの本数がありながら、わずか十数往復にすぎない。東北新幹線に至っては十往復にも満たない。その中であって上越新幹線は孤軍奮闘、かなりの本数が今も営業しているのは喜ばしい。一方、在来線の定期列車では「北斗星」と「つばめ」だけという寂しい状況になっている。だから、私も食堂車やビュフェを営業している列車に乗ると、なるべく利用するようにしている。

列車は電車や客車の並ぶ中を駆け抜ける。その横を単線の高架線が走っている。何のための高架だろう。貨物列車が通るための緩行線だろうか。

しばらく走って、やっと最初の駅の庭瀬に着いた。

「これって、やっと最初の駅か」

「そやの」

「四国やったら、2駅分くらいの時間かかるとるぞ」

本州へ出ると駅間がすごく長く感じる。四国だと、3分も走ればもう次の駅で、5分もかかるようなところなどあまりない。

次の中庄に着いたとき、目黒君が、

「この駅、何かで降りたことないか？」

「中学校のとき、君の兄さんに引率してもらって『NASA宇宙博』に来たやん」

「あ、そなんあったな。もう忘れてしもとる」

十数年も前の話で、JR全線完乗を志す前だから、駅の構造など全く覚えていない。

にわかにはビルが増えてきて、都会の雰囲気が出てきた。もうすぐ倉敷だ。先程の高架線が下りてきた。11時27分、倉敷着。

倉敷の駅で気になるのは私鉄の水島臨海鉄道だ。あまり話題に上らない私鉄だけど、国鉄で使っていた古いディーゼルカーが使用されている。いずれ乗らねばならないと思いながら、未だ乗ったことがない。同じ岡山県にあった下津井電鉄も「いずれ」と思っているうちに乗らないまま廃止されてしまったので、同じ轍は踏まないようにしようと思う。

倉敷を出て、右に伯備線のレールが分岐する。少し行ったところで、その伯備線に沿う高梁川を渡る。

目黒君が鞆から何やら取り出す。先の北海道旅行とサークルの仲間といった房総半島の

写真だ。あわせてフィルム4本分ある。2つの旅行でフィルム4本だから、あまり多くはない。目黒君は旅に出ると、あまり写真を撮らない。私も最近はだんだん減ってきた。今回に至っては2人ともカメラすら持って来ていない。私は写真を見ながら、

「雪まつりに流氷か、ええのお。俺や5回も行っとのにまだ見たことがない」

と羨望の眼差しで目黒君を見る。

「まあの。でも、すごい寒かったぞ。あ、そうそう。おもしろいもんがある」

「…なに？へえ、出しとんや」

目黒君の言う「おもしろいもん」というのは、地元香川県が雪まつりに出展しているのだ。たしか、県でやっている何かのキャンペーンだったと思うが、「わがかがわ」という幟が立ち、その横にマスコットの「あおおにくん」なるぬいぐるみも一緒にいる写真だ。旅に出てまで、我が地元に所縁のあるものはあまり見たくない。これでは異質なものに触れたいという旅の本質が失われてしまう。でも、近頃はだんだん地域性が薄れてきているから、この異質なものに会うことが少なくなっている。

房総半島のほうは銚子の犬吠岬が写っている。行きたいと思う。

「今、金のない俺にどこに行ったにせよ、こんなん見せるんは酷や」

「来たらええやん」

「また、そんな無責任なことを言う。金が無い言いよるやろ」

他には雪まつりの終わったあとの大通公園の雪像の残骸の写真、ぬさまい 釧路の幣舞橋の銅像の頭に止まっている鳥の写真などが印象に残っている。目黒君の撮る写真はこの手合いが多く、見た目は面白いけど、観賞用としてはもうひとつである。

さて、列車は国道2号と並走して、久しぶりにスーパーマーケットや大型電器店などが目立ってきて、福山に着いた。高架の立派な駅舎だ。こうやって高いところから見ると、福山は大きな街だ。駅前の目抜き通りなど、高松駅前の中央通りの1.5倍くらいの広さはあるようだ。北側には福山城が隣接している。

「でっかい街やのお」

と目黒君が言う。

「高松よりずっと大きいわ」

2人ともそれはよく知っているけど、山陽本線を在来線で走るのが数年ぶりだから、今さらながらではあるけど、こういう感想が口をついてしまう。

列車は一つひとつこまめに駅に停車して、のんびり西下している。時計は、もう12時を回っている。普段ならもうとっくに下松に着いているはずだ。

「腹が減った」

と私が言うと、

「俺はそうでもないぞ」

「そりゃ、君はさっき新幹線で食ってきたばかりやん。岡山で蕎麦でも何でも食ったらよかった」

「ほんだけん、東京から乗ろうぜって、言うたやん」

「まだ、言いよんか」

目黒君は肩を揺すって笑っている。私もそうだが、目黒君もかなりあとまで同じ話題を引っ張る。

海がしばらく見えて尾道に着いた。ここまであまり海を見せてくれていない。発車するとまた、すぐに海は見えなくなってしまった。そうこうするうちに、糸崎を経て乗り換え駅の三原に着いた。ここも高架である。



ここで呉線の広行きに乗り換える。わずか2分の接続だけど、同じホームの乗り換えなので楽だ。

私はそのまま列車に乗ったけど、目黒君は自動販売機でジュースを買っている。でも、少し手間取っているようだ。私の横では車掌が時計とにらめっこをしている。まもなく発車だ。

「少し待ってください」

私が車掌に告げているうちに目黒君はゆっくり列車に乗り込んだ。ドアはすぐ閉まって12時42分発車。車両はオールロングシートで呉線には似付かわしくない。

「こんなに短い接続やったんか」

「今さら何言うてんの。知っとしてジュース買んよったんと違うんか」

「いや、知らなかった」

と笑っている。

てっきり接続2分だから、ジュースくらい買えるという判断の元での行動かと思っていたけど、それ以前の問題である。しかし、このプランの作成者は誰だろう目黒君である。当の作成者がこんな調子で旅をしているのだ。この目黒君、大物なのか、ただの無頓着なのか、つかみどころのない男である。

まず、列車は海に向かって南進する。ずっと高架だから三原市の様子がよく分かる。高架からそのまま土手のような高いところに入り、沼田川を渡ると、今度は東に向かい、海が見えてきたところで再度南へ向きを換える。高いところを走っているから、海が遠くまで見える。

「8年もご無沙汰しとったら、初めて乗るようなもんや」

「そのときのことや全然覚えてないわ」

「じっくり景色を眺めよう」

どこまでも晴れ渡った瀬戸内を見ながら2両編成の電車はゆっくり走っている。山陽本線の山間を走るときのようにモーターを唸らせて走るようなことはない。

呉線もまた駅間が長い。長い分、わずか一駅でも三原からかなり距離があるので、最初の駅である須波で早くも十数人が降りていった。ロングシートの車両に立ち客が出ない程度にしか乗客がいないので、たった十数人でもたくさん降りていくような気がする。

「やっぱり牡蠣の加工場があっちこっちにあるの」

「牡蠣のお」

目黒君の表情はあまり冴えない。彼は牡蠣が苦手だ。

「この冬も生牡蠣、逃してしもた」

「まあ、ええやん」

苦手だから、他人事である。それにしても、本当に生牡蠣を食べる機会に未だ巡り合っていない。今回は牡蠣の食べられそうなところには立ち寄らないから、いつ食することができるのだろうか。でも、ぜいたくを言っても始まらない。

忠海に着く。これは「ただのうみ」と読む。駅名標を見た目黒君が、

「『ただのうみ』て、ただで海をくれるんかの」

「あんまりええ響きの駅ではないの」

「何でもない『ただ』の海かもしれん」

こんな駅名ではアナウンスする車掌も大変だと思う。

列車は海から離れて少し内陸に入り、長めのトンネルをくぐる。三原から早くも8つ目のトンネルだ。そのトンネルを抜けると久しぶりに街に出て、竹原に着いた。

「本当はここで降りて、酒でも買ったかったんやけど」

「うまい酒あるん？」

「俺もこのどの酒いうんは知らんのやけど、竹原は造り酒屋の多い町で有名やで」

「へえ」

「この出身の池田勇人も家は造り酒屋をやっとった」

駅にはその池田元首相の娘婿である池田行彦氏の外相就任を祝う横断幕があった。

吉名と安芸津の間で再び海が見えてきた。これから向かう方向へ目を向けると、黒い煙が立っている。

「あの煙、怪しいの」

「なんやろか」

「まさか山火事やないやろな」

「山火事でもこっちは海沿いやけん、全然関係ないやろ」

「狼煙かもしれん」

と冗談を言いながら、眺めているうちに安芸津に着いて、さらに先へ進むと、煙は心なしか広がっているように見える。なんだか不安になってきた。

かざはや

13時28分、風早着。ここで上りの三原行きと行き違うことになっている。呉線は単線だから、行き違いは全て駅で行う。でも、その三原行きが定刻の13時30分になっても入って来ない。不安は的中した。

「ただ今、風早・安浦間で火災が発生して、列車の運転を見合わせております」

と車内放送が流れる。

「おいおい、ほんまに山火事やと」

「収まるまで前へは進めんな」

「でも、今回は行った先で誰が待っとるといこともないし、時間の制約があるわけでもないし、用事も別れない。今日中に着けたらええけん」

「そりゃ、そうやの」

「長期戦になりそうやけど、それはそれでええやん。動くまでゆっくりしようで」

「1本前やったら、抜けとったんか。いっそ火の中を強行突破するか」

そう言って、目黒君は舌打ちする。

煙は止まるところを知らず、もうもうと上空へ上がっている。何となく赤っぽい。かなり延焼しているのではないか。そうなれば、先へ進むどころではない。それに、この列車が火災現場にやって来た最初の列車だから、前に進むのはますます難しいように思われる。14時を回ったけど、車内放送は相変わらず「運転を見合わせています」と言うだけである。

目黒君はいつもラジオを携帯している。それを耳に当てる。うまい具合にニュースの時間で、12時半頃発生したという。

「何や、さっきやんか」

「12時半の出火では消えるんはまだまだ先の話しやの」

上空では消火剤を運んでいるようで、ヘリコプターが頻繁に往来している。

「あの煙に、あのペースでは追っ付かんぞ」

「まあ、改札の外でも出てみようか」

列車が停まって1時間近く経っている。ホームを歩いたり、外に出て駅舎を観察したりする。

天気もよく、のどかだけど、一緒に乗り合わせた人たちは慌ただしい。出張と思われるビジネスマン2人はこれから行く得意先やら近くのタクシー会社へ電話をかけたりして、落ち着かない様子だ。数人のおばさんグループは心配そうに車掌に状況を聞いている。今

日は第2土曜日だから、学校は休みで中高生もいる。家に電話を入れて、迎えに来てもらったりしている。そうしているうちに1人減り、2人減り、最初の半分くらいの人数になった。

「こんなことになるんやったら、カメラ持って来とったらよかった」

「立派な報道写真になるぞ」

などと不謹慎なことを言う。

運転手と車掌が駅の鉄道電話で近くの有人駅へ連絡を取っている。またどこの駅からか保線区の人がやって来た。やりとりを横で聞いてみても、どうも要領を得ない。

「このまま車両のモーターを作動させますと、バッテリーが上がり、列車が動かなくなりますので、一部のドアだけ開けて、列車のモーターを止めます。トイレなどに行かれるお客様は開いているドアから出入りしてください」

という放送が流れて、パンタグラフが下ろされた。電車の構造など全然知らないけど、そういうことらしい。あとは時折り、車掌が2両編成の各車両それぞれに乗客に向けて「運転を見合わせている」旨を説明して回っている。

しばらくして新しい情報が入った。こういうときの情報は砂漠の中でオアシスを見つけるようなものだ。でも、オアシスではなかった。

「ただ今、山火事の消化活動をしておりますが、火は山の麓のほうへ来ており、呉線とともに並走する国道も通行止めになっておりまして、大変申し訳ございませんが、広方面へは抜けることができません」

これで前へ進むことはできなくなった。1時間や2時間の足止めで前に進めるのなら、単なるアクシデントで済むけど、これはいよいよ長期戦になるなど思いながら、

「言うことは三原まで戻れ、ということか。まあ、しゃーないか」

と言うと目黒君が、

「この辺に路線バスはないんか？」

と言う。盲点であった。このような状況になれば、何もJRにこだわる必要はない。三原まで戻らずに、どこか別ルートがあるのなら、それを利用して、山陽本線に乗って西へ向かえばいい。さっそく時刻表の索引地図を開いた。

「ないのお」

ないことはないけど、使える路線バスがないのだ。時刻表に掲載されているのはこの先の広と山陽本線の西条を結ぶJRバスがあるのみで、地元の足たる路線バスは載っていない。呉線には国道が並走しているので、実際はあるのだろうけど、その国道が寸断されている状態ではそれも期待できそうにない。もう、あとはJRがバスをチャーターするより他はない。

時刻表と格闘していると車掌がやって来て、

「ただ今、竹原と広の間が不通になっております。代行バスを出す予定ですが、こちらへの到着時刻は未定です」

やはり、バスかと思うと同時に、後ろにも進めないことが分かり、ちょうど一番間の悪い列車に乗ってしまった私たちの運の悪さを悔やむ。

目黒君が、

「1本前か後やったら、どうにか対処できたのに」

と言う。

「前やったら逃げ切っとるし、後の列車にしたって、不通区間にはまだ入ってないはずや三原からまだ3駅か4駅目くらいだろ」

目黒君が、

「この辺でJRバスのありそうなんはどこや？」

と聞くので、私は再度時刻表を開いた。

「西条か三原やお。他にはなさそうやし、このどっちかが一番近そうや」

「どのくらいかかりそう？」

「三原から列車で50分くらいかけて来るところやけん、1時間半くらいかかるかな」

「今すぐ出たって、着くんは4時近くでないか」

あきらめて、外へ出る。モーターを切って物音ひとつしない列車の中より、青空の広がる太陽の陽気の下でいたほうがいい。

どこにでもある田舎の駅舎だ。駅前にはこれまたどこにでもある切符の委託販売をやっている喫茶店と一軒の雑貨屋がある。ただし、この喫茶店、人の出入りはあるものの中は薄暗い。切符の販売をしているというけれど、本来の営業はしているのかと思うくらいひっそりとしている。

この喫茶店の名前は「安芸」という。看板には蒸気機関車のイラストも添えてある。この店名はもちろん旧国名の安芸から取ったのには違いないけど、このイラストからするとかつて東京－広島間を呉線経由で結んでいた急行「安芸」に因んだものようだ。というのは、急行「安芸」は呉線の電化とともに消えていったけど、呉線内はその引退まで蒸気機関車がこの「安芸」を引っ張っていたからだ。とするとこの喫茶店はその頃からあったということになるから、少なくとも27、8年以上前のことになる。

その先に1階が駐輪場、2階が学習塾になっている建物がある。その向こうに海が見えるので、そこへ行ってみる。駐輪場といってもあまり自転車は止まっておらず、スペースはかなり余裕がある。その駐輪場の手摺りにもたれて海を眺める。眼下5メートルくらいのところを国道185号が通っている。行き交う車やバイクの中には明らかに野次馬と思われるナンバープレートを折り曲げたバイクが何台も火災現場のほうへ走り抜けている。

それにしても瀬戸内は波もなく、暖かく気持ちがいい。とても3月上旬とは思えない陽気だ。

「なんか、ええのお」

と目黒君が言う。何がどうということもないのだが、同感である。こんなに何も考えずに用事もなく、ただ列車に揺られているだけの旅などしたことがないし、列車が足止めを喰らって何時間も駅の内外でぼおっと過ごすのも初めてのことだ。こんな旅もたまにはいいかなと思う。

だいぶ火も収まってきたようで、煙は少なくなった。こちらから見ていると、前へ進めそうだ。お昼代わりに菓子を食べたり、ジュースを飲んだりしながら、のんびり過ごしてきたけど、17時くらいになったところで車掌が、

「まもなく代行バスが到着します。これで竹原まで乗って頂いて、その先は列車が接続しております。バスがこちらに着く頃に乗り場までご案内します。なお、広島方面へ行かれる方は三原で本線の列車にご乗車ください」

と言う。地元では山陽本線の三原－広島間は略して「本線」と呼ぶのである。

「やっとか」

「もう5時やぞ」

「バスと列車で1時間半くらいかかって、三原には6時半かな」

「いうことは、まるまる6時間遅れか」

「そやの」

「下松着くんは23時過ぎか」

「もう寝よるかもしれん。仕方ないか」

パンタグラフを下ろして死んだような2両の電車を残して、最後まで残った20人くらいの乗客はJRの職員の誘導でバス乗り場へ向かった。

バス乗り場はどこバス会社か分からないけど、路線バスのバス停だった。やっぱりあったのかと思う。これに気付いていれば、あるいは早く三原に戻ることができたかもしれないけど、国道が寸断されていては、どちらにせよ無理だったのかもしれない。

しばらくして、三原方面から1台のバスが数人の乗客を乗せてやってきた。前面の行き先票には「列車代行」と大書きした表示幕が掲出されている。このバスで不通区間の端っこの竹原まで戻る。

私としては風早駅で過ごした時間はけっして悪いものではなかったけど、いざ現実的に考えてみると、ここまでいた以上は時間はかかってもいいから呉線を通ってみたかった。それが逆に三原まで舞い戻らねばならないのは時間だけ無駄にしたようで、あまり気持ちのいいものではない。しかも、普通列車だから、いくら遅れても払い戻しを受けられないので、ますます面白くない。せめてもの救いは何とか今日中に下松に着けそうなことである。

「ここでJRバスの世話になるとは思わなかった」

「たまにはバスもええやろ」

乗客が乗り終えると、バスはすぐに発車した。

バスは一般道を走るから、列車のようにスムーズに走ってくれない。信号があれば止まるし、車体が大きいから狭いところでは対向車に道を譲ったりする。おまけに途中2駅とはいえ、竹原までの全駅に停まっていくから、なおのこと時間がかかる。私たちの乗った風早駅のように国道沿いにある駅ならいいけど、吉名のように国道から外れていると、駅へ行って国道に戻るまでが一苦労だ。軽トラックしか走れないような狭い道を走るときの運転手の表情は真剣そのものだ。

安芸津で大勢乗って、すし詰め状態のバスは30分弱で竹原に着いた。駅前には年季の入った古めかしい雑貨店があつたりして、のどかな駅前風景で趣きがあるけど、この非常事態では次の列車が何時何分発かも分からないので、ゆっくり見ていくこともできない。

50人くらいはいるだろうか。始発とはいえ、いっぱいかなとげっそりしながら待っていると、広方面から2両編成の電車がやってきた。でも、風早で別れた車両とは違うし、途中の2駅でも見かけなかった。竹原の構内にいた車両だろう。案ずる事無く座ることができて、これも乗客が乗り終えた数分後に発車した。時刻は18時になろうとしている。

あとは来た道を引き返して40分くらいで三原に戻った。約6時間ぶりの三原である。もう辺りは薄暗い。本線のほうは呉線のことなど構わずダイヤどおりに運行されているようだ。次は18時40分発の広島行きだ。発車まで少し時間があるので、2人でホームの立ち食い蕎麦を食べた。だしがあまりに熱すぎて、麺の味もだしの味も分からなかった。

18時40分発の列車は、岡山始発で乗客は結構いる。三原からの乗客も多く、降りただけ乗って、乗る前と大して変化はない。結局、私たちは座ることができなかった。

外はすっかり暗くなってしまった。もう見るものもなく、ただ列車に揺られるだけである。目黒君が、

「あとどのくらいかかる？」

「大ざっぱに、広島、岩国、下松で3時間やの」

「実際は？」

立っていて、時刻表を取り出すのが面倒なので経験則で答えたのだが、目黒君はそれで

は納得がいかないのか、執拗に迫る。それでも私は相変わらず臆測で、

「多少の待ち時間があっても10時過ぎには着くやろ」

と答えると、いかにも不服そうな面持ちで私の顔を見る。

時折り、電車や貨物列車とすれ違う。沿線はぼつぼつと建っている家や道路脇の街灯の他は闇に包まれていて、家が多くなったと思うと駅に着く。駅に着くと、周りに同化したかのように静かになる。駅毎に何人かずつ降りて、やがて改札へと消えていく。それを見届けぬうちに列車は発車する。

始めから本線経由なら酒くらい買っていたであろう西条を過ぎ、八本松に着く。山陽本線で一番高いところにある駅で、標高は255メートルである。標高255メートルなど中央本線や小海線のような山岳路線に比べればものの数にも入らないけど、海沿いの比較的平坦なところを走る山陽本線にあってはかなりの高さである。これから次の瀬野へかけて、一気に下りていく。

しかし、真っ暗闇の中では勾配を下りていようが何をしていようが、いまひとつ分かりづらい。気が付くと、ひっそりとした瀬野に着いた。側線には列車を後押しする専用の電気機関車が数両停まっている。まだ今日の列車はいくつもあるのに、瀬野駅はもう営業が終わったように静かだ。

この辺りから広島ベッドタウンらしく、駅周辺は住宅地が目立つようになったけど、土曜日のこの時間帯だからかあまり活気は見られない。車内も静かで、皆疲れているのだろうか。

海田市で呉線と合流する。本来なら4時間半前に通過しているはずである。駅に着く手前で、

「呉線にお乗り換えのお客様は、三原行き〇番線…」

という車内放送が流れた。私は、

「おい、復旧しとるではないか」

つい声を荒げてしまうのも無理はない。先ほど、竹原で乗った呉方面からやって来た列車が風早まで乗ってきた車両と違っていたのは、復旧していたからなのだろうか。

「もうちょっと待っとたら行けとったということか？」

「なら、こんな迂回せんでもよかったのに」

「1時間は損したやろな」

悔恨の念を抱きつつ海田市を出ると、いつしか列車は明るく賑やかな広島駅のホームに滑り込んでいた。19時54分着。上り線には特急「あさかぜ」東京行きが入っている。

景色など見えないから、機械的に乗り継ぐだけで面白味がない。次の列車は20時02分発の柳井行きだ。さっきの列車は最後まで座れなかったけど、今度はクロスシートのほうに座ることができた。呉線の影響か少し遅れて発車した。

夜とはいっても、さすが広島だ。ネオンが煌びやかだ。太田川を渡るとそれらの光が水面に映って、それが揺れてキラキラと輝くので、なおのこときれいだ。

列車は国道2号と広島電鉄と並走するようになる。車は上下ともに混雑していて、ライトが数珠つなぎになっている。そんな中を広島電鉄の2、3両の可愛らしい電車が時々すれ違ったり、あるいは我々に追い抜かれたりしている。

廿日市を過ぎると、沿線もだいぶおとなしくなって、久しぶりに海が見えてくる。宮島ボートが見えてくると、宮島口に到着する。この時間ともなると、もう宮島観光らしい乗客は見当らない。停まったかと思うと、すぐ発車する。左手には宮島の島影が見える。

「ところで、この列車でどこまで行くんや？柳井まで行っても接続ないんやろ？」

と目黒君が言う。

「柳井まで行ってしまおうか、途中の岩国で降りるか。どっち道同じ列車になるな。他の駅で降りても面白なさそうやし」

「柳井ってどんな所や？」

みかど

「金魚と三角餅と寒露醤油」

和紙で作った愛敬のある金魚と三角餅という餅のなかに餡子の入った饅頭と柳井で醸造される美味しい醤油がある。街並もいい。

「それは知っとるけど、この時間に行ってもいかんやろ」

「まあの」

「岩国にしよ」

今この時分に柳井で降りてもおそらく何もないだろう。時間を潰すなら、たしかに岩国のほうが妥当のように思われる。

大竹を出て、山口県に入る。やっとここまで来たかと思う。巨大な工場群が現われて、20時47分に岩国に着いた。

改札を通過して、コンコースに出る。米軍基地のある街らしく、駅の内外にはアメリカ人が多い。

ところで、三原で立ち食い蕎麦を食べてからまだ2時間余しか経っていないけど、何か食べたくなくなった。

「あ、立ち食い蕎麦もう終わっとる。キヨスクも閉まっとるやんか。もう9時やけん、しゃあないか」

「何かないかの」

「外出てみるか」

駅前にカレー屋とラーメン屋が見える。

「どっちか言うたら、ラーメンやの」

「俺はいらんぞ」

目黒君はまだお腹は空いていないらしいけど、構わずラーメン屋へ行ってみる。

「こんな時間でも混んどるぞ」

「席が埋まってしもとる」

「やめよう」

こうなると、時間が余ってしまう。仕方がないので、駅に戻ってコンコースのベンチに腰を下ろす。

「まだ、30分もある」

所在なく過ごしていても、全く面白くないということはない。2人でいれば結構気も紛れるものだ。気が付けば、発車10分くらい前になったので、改札に入る。

この時間帯でも乗客は多い。20人くらいはいるようだ。山陽本線の白市と岩国の間は「シティ電車」と呼ばれる列車が頻繁に運転されていて、特に広島ー岩国は昼間は10分間隔で運転されている。ところが、岩国以西は一転、1時間に2本と激減してしまう。だから、そのせいで我々も岩国で40分も待たされているし、夜の9時を過ぎても乗客が多いのだ。

広島方面から4両編成の列車がやって来た。乗客が入れ替わって、すぐに発車する。

列車は寂しいところを走っている。夜だから余計そう感じる。これでは「シティ電車」が走っても需要は見込めそうにない。でも、基本的に海に沿って走るので、夜とはいえ、

車窓風景は退屈しない。

駅に着いてドアが開くと車内は静かになり、1人、2人と降りていく。遠くから波の音だけが聞こえてくる。辺りは街灯が点々とするだけで、夜行列車に乗っているような気持ちになる。

柳井港に着く。この駅は松山方面へのフェリーが真っ先に思い浮かぶ。かつての宇高連絡船とダブって見えるのか、時間はかかるけど、何回か利用している。2年前の「急行三昧」にも登場している。いずれ目黒君も乗せてみたいと思っている。

「この駅降りて、国道挟んだ向こう側に松山行きのフェリー乗り場があるんや」

「へえ。松山までどのくらいかかる？」

「2時間ちょっと。船が出て、しばらくは海を眺めて、それからカーペットに落ち着いて2時間くらい寝るんが俺の常套手段や。今まで、4回くらい乗ったけど、全部こっちからの乗船や」

その柳井港を出て、数分で先ほど話題になった柳井に着く。

「こんな駅やったっけ？夜やけん、あんまり分からんけど、大きくなさそうや」

「駅の南側が市の中心やけん、駅だけ見たんではちょっとした街っぽく見えるかもしれんの」

JRの駅がその都市の中心部から少し離れているのはよく聞く話だ。駅も周辺も寂しそうだけど、岩国と下松の間で賑わっているのはここ柳井くらいのものである。

あともう少しで下松である。これからは海と別れて島田川に沿って、やはり同じような静かなところを走る。岩国ではかなりいた乗客もだいぶ減ってきた。

しばらく走ると工場が見えてきて、雰囲気的には柳井とそう変わらない下松に着いた。22時26分、当初の予定から5時間10分遅れの到着だ。

「やっと着いたんか」

「お疲れさんやの」

疲れた2人を迎えるにはお似合いの寂しい駅である。橋上駅になっていて、北側へ下りる。タクシー乗り場があり、賑やかな屋台のラーメン屋もある。周りの店は閉まっているけど、唯一開いているあまり人気のないコンビニエンスストアがやけに眩しい。

「酒は売っとるかな？」

と中に入ってみる。

「ないなあ」

「道中何かあるやろ」

2人で夜の下松を歩く。楠君のアパートまで15分くらいで着く。

「ところで、目黒君はここは初めて来たんやったかの？」

「そうや」

「まあ、俺もまだ3回目やけど」

「どんどこ？」

「駅は見てのとおり寂しいけど、賑わっとんは市役所越えて少し西になる」

今、市役所を越えてその西へ向いて歩いている。

「斉さんよ、何で、2回しか来たことないのにそんなに知っとん？」

「目黒君も今回ので覚えてしまうやろ」

「俺はそんな器用な真似はできん」

途中、1軒の酒屋を見つけた。こんな時間でも開いていることに感謝しながら店に入る。

「時間が時間やし、今晚はビールだけでええやろ」



と言いつつ、500ミリリットル入りの缶ビールを12本とつまみを買う。

「今からでも、1人4本くらいは許容範囲だろ」

「ビールだけなら、大丈夫」

500ミリリットル4本といえば、2リットルである。今から飲む量としての許容範囲とはとても思えない。

さらに西へ進む。右手にはもう閉まっているけど、大きな書店がある。これは対岸の愛媛県で全県的に出店している明屋書店である。全国的に見てもレベルの高い書店だそうである。

「へえ、下松にも明屋があるんや」

と目黒君が驚く。

「前ここ来たとき、入ってみたけど、広いし、探しやすいでよかったぞ。それに駐車場も広いけん、車でも気軽に来れる」

それから少し行くと交差点に出て、これを北へ上がる。その交差点の角に大きな建物がある。

「あれは何や？」

と目黒君が聞く。

「あれは西友」

「でっかいのお」

「いろいろテナントも入っとるしの。ここのしゃぶしゃぶ屋へ楠君の職場の人と食べに来たことがある」

今歩いてきた東西の道を外れたら、急に暗くて寂しい道になる。点々とする街灯だけが頼りだ。

「もうすぐ着くぞ」

「ところで斉さん、ほんまにここ来るん3回目か？」

目黒君にも楠君にもこの点だけは舌を巻かれる。たしかに地元でない私がある程度は分かっているのだから、無理もない。

「さて、どうやって急襲しようか」

「どうせ鍵はかかっとるやろうし、いきなりは入れんわの」

「この時間ではもう寝よるかもしれんけん、玄関の前で携帯で3回くらいコールして、電話に気を取られとるうちに呼鈴鳴らそうか」

「とにかく勘付かれんようにせないかん。で、何気なく今日のニュース見たいとか言うてあの山火事を見よう。あれは全国で出るはずや」

楠君のアパートは最初の交差点から少し東に入ったところにある。ビールを買ったりしたから、もう23時になろうとしている。

アパートの階段を上りながら電話を鳴らして、出ないうちに切って呼鈴を鳴らした。ドアが開いて、

「よお、久しぶりやの」

「お前ら、何しよんや」

「え？何って、九州行けんかったし、遊びに来たんや」

2人とも笑いを堪えきれない。

「まあ、上がれ」

「まずはお土産や」

とビールとつまみを置く。

「何でこんなに遅いんや。もう寝るところやった」  
　　そう言いながら、楠君はコップを持ってくる。  
「悪い悪い。今日は鈍行で来たけんの。金ないし、『青春18』や」  
　　目黒君が、  
「ところで今日のニュース全然知らんのや。ちょうど時間もええし、どっかないか」  
　　と言う。楠君がチャンネルを変えていく。すると、例の火事が映し出されている。  
「うわあ、これどこ？広島やん。安浦やと。すごいの」  
　　と楠君がテレビに見入る。こうなると、もういけない。  
「俺らの、この火事目のあたりにしての」  
「え、呉線から来よったん？」  
「そうや。初乗りから8年ぶりやったけんの。1つ前か後の列車やったら、どうにか対処できたんやろけど。一番間近まで行ってしもたけん、身動きが取れんよなって、3時間半も足止め食ろてしもた」  
「ほんまは17時16分に着くはずやったんや。で、玄関前でひそかに待ってって驚かそう思とったんやけどの」  
「不通になったおかげで、三原に戻って本線経由や」  
「とんだ災難やったの。でも、無事に着いてよかったやん」  
　　お互いのコップにビールを注いで乾杯する。3人が揃うのは去年の夏以来だから、約7ヵ月ぶりだ。ここ山口県で会うのは楠君が徳山にいた頃のやはり夏で、2年半前まで遡らねばならない。こうやってみんなで会うのもなかなか難しくなってきた。  
「今日、あんな火事に遭うてしもたけど、すんなり来るよりはずっと面白かったの」  
　　これは私の持論である。  
「そりゃ、ハプニングがあったほうが楽しいで」  
　　楠君も旅のハプニング容認派である。彼の場合、バイクで走る旅だからレールの上を走る私のような旅とは違って、何もかもがイレギュラーだ。目黒君はどちらかというと、計画どおり事が運んでほしいと考えるタイプだ。でも、  
「あの風早駅はのどかでよかった。のんびりできたわ」  
　　と海を眺めながら、手摺りにもたれていたときと同じ感想を洩らした。  
「ほら、今回の旅って別に楠君に行くよって言うもったわけでないし、時間の制約もないし、万事が気楽やったわけや。ほんだけん、別に焦ることもなかった」  
「うーん、うらやましい」  
「ただ、あそこまで行ったけん、呉線は全部乗りたかったな」  
「そやの」  
　　目黒君も同じ考えのようだ。  
「お前らの、人がこうやって疲れて仕事から帰って来とんのに、何でそうやって誘惑するようなことを言うんや」  
　　例によって目黒君が、  
「どっか行ったらええやん」  
　　話は弾み、酒も進む。3人とも酒豪とは言わないけど、人並み以上には飲む。少しずつ饒舌にもなる。  
「で、明日はどうするんや」  
「何も決めてない。柳井へ行こうか下関にしようか」  
「切符のほうは『青春18』はあと4枚分あるけん、2人の明日の分と明後日帰る分はある」

「明日起きてから決めるわ」

こういうとき、時間が経つのは早い。あっという間に1時とか2時になっている。それでも話は尽きない。旅の話ばかりではない。仕事やら恋愛の話にも及ぶ。

仕事のほうは私はどうしても落ち着かないけど、楠君は写真関係の仕事をしていて、目黒君は冒頭で書いたとおりだ。それぞれが違うことをしているので、話はあまり長くは続かない。すると、楠君が喜んで、

「で、斉さん、彼女とはその後どうなっとんや？」

「どないもこないも、別に。ぼつぼつやで」

元来、彼女のいなかった私にも曲がりなりにも彼女ができたということは言っていたので、こういう質問が飛んでくる。久しぶりに旧友が集まれば、こういう話題になるのは当然かもしれない。

「え、斉さん彼女できたん？」

こういうことには興味を示さないのか、または興味があるけど、話に参加しないだけなのか、それは知らないけど、今日は珍しく目黒君が驚きの表情で私の顔を見て、話を聞いている。目黒君が聞いてきたのはこれだけで、あとは聞くだけだったけど、それでも私を驚かせるには十分だった。

「ちゃんと、逢んよんな？」

「そこそこ逢んよるし、電話もしよる」

「なら、ええやん」

「…まあの。でも、まだ始まったとこやけんの、これからやで。で、君のほうはどうなんよ？」

「え？俺は何もないわ。斉さんがうらやましいわ」

「ええ人がおるって、言いよったやんか。君がまさか引っ込み思案でもあるまい。で、何かしたんやろな？」

「今、考え中や」

「今度ホワイトデーもあるし」

「そういや、そうやの」

楠君は何事においても積極的である。すぐ行動に移すタイプだ。一方、目黒君は知識においては広く深いものを持っていて、何でも知っている。でも、面倒くさがりな面があり、腰も重いほうだ。だから、楠君と目黒君は対極に位置しているといっている。私はちょうどその中間にいるようだ。3人がそれぞれ異なるから、うまくバランスが取れて十数年来の付き合いが続いているのだと思う。

そんな話をしていると、もう3時を回っている。

「もう寝るか」

「俺、明日仕事なん知っとん？」

「知っとる」

「でも、俺らに突然来られて、結構楽しんだやろ？」

「うん」

楠君は頷いた。実際は大迷惑に違いないけど、ハプニングに明け暮れた初日はもう2日目の未明になっていた。

## 「行き当たりばったり」の続きを読む